

2013/2014 シーズンのインフルエンザ治療指針

日本小児科学会インフルエンザ対策ワーキンググループ

2014 年最初の日本小児科学会インフルエンザ対策 WG からの大切なお知らせです。

1. 今シーズンは A(H1N1) pdm09 の流行が再び起きており、小児での感染拡大が危惧される。
2. すなわち前回のパンデミック同様、小児における重症肺炎の多発の可能性がある。
3. 今シーズンは A 香港型・B 型も混在する点で注意が必要である。
4. 注目すべき点として、札幌市で A(H1N1) pdm09 ウイルスにおいて安定的に増殖できる変異を併せ持つ H275Y 変異株が小児を中心に検出され、今後の動向が注目される。
5. この変異株は、前回のパンデミックで有効であったオセルタミビルの効果が高くなると想定され、肺炎などの重症化に繋がる危険がある。
6. この耐性株への対応を含めた抗インフルエンザ薬の選択および薬用量について現時点の情報を基にまとめた。
7. 併せてワクチンの未接種者への推奨と、重症インフルエンザ肺障害の症例報告とその対応（診療指針）について以下にまとめた。

インフルエンザ対策ワーキンググループ

森島 恒雄、細矢 光亮、岡部 信彦、庵原 俊昭、植田 育也、
岡田 賢司、多屋 馨子、森岡 一朗、宮入 烈

担当理事：野々山恵章、有賀 正、森 雅亮

(背景)

2013/2014 シーズンについては、2013 年第 51 週（12 月 16 日～12 月 22 日）に全国的な流行開始の指標である定点あたり報告数 1.00 を上回り、全国各地でインフルエンザの流行が始まりました。特に重要な点として、この数年間流行がなかった A(H1N1) pdm09 の分離が次第に増加しており、2014 年に入ってから 50%を超える規模になってきています。神奈川県や静岡県では、2009 年のパンデミックの時に見られた小児の重症肺障害が報告されています。注目すべき点として札幌市において昨年末、オセルタミビル耐性株が治療前の患者から分離されましたが、その後札幌市外、三重県、神奈川県、山形県へと拡がりをみせています。前回の流行から 4 年以上が経過し、感受性を持つ小児が増加している状況の中、今後、A(H1N1) pdm09 の流行が拡大していくなれば、パンデミックの時経験した「小児の重症ウイルス性肺炎」の増加が危惧されます。インフルエンザ対策 WG では、上記の現状に鑑み日本小児科学会としてどう取り組んでいくかについてまとめました。